

「学びに向かう力、人間性等」の育成を
柱にした授業改善
～デジタル体育ノートの工夫を通して～
東広島市立八本松中学校

全生徒数	499名 (男子 269名 女子 230名)
全クラス数	17クラス(特別支援級3クラス)
TEL	(082) 428-0202

1 課題と目的

体育に苦手意識を持っている生徒の多くが技能習得に課題を感じている。昨年度、「する・見る・支える・知る」の体育の考え方に主眼に置いて授業を行ったところ、運動愛好度が向上した。そこで、今年度は、「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力の育成に主眼を置いた授業改善を行うことで、運動愛好度をさらに向上させることを目的とする。

2 主な取組の内容(球技)

(1) デジタル体育ノートの工夫

デジタル体育ノートを活用し、振り返りを音声で記録させた。友達からのアドバイスや自身の考えを記録することにより、思考を整理整頓するとともに、自己の変容について確認をさせた。

(2) 球技の領域における「共生」に視点を当てた授業内容の工夫

車椅子バドミントンの体験、バスケットボールの授業にアダプテーション・ゲームを行い共生の視点を取り入れた授業を実施した。

(3) 運動プログラムの実践による体力向上

新体力テストの結果から自身が課題とする体力要素について分析し、各種目の特性に合わせたプログラムを作成した。そのプログラムを実践し、体力の向上に取り組んだ。

(4) 生徒から生徒へ、「伝える力」の育成

広島大学の協力を得て、「HACHU プロジェクト」を立ち上げ、自分の考えをまとめ、伝えることで主体的な学びの実現及び協力、参画

等の学びに向かう力、人間性等の育成につなげる授業改善を行った。

3 取組で工夫したところ

生徒に視点を明示して振り返りを行わせたり、デジタル体育ノートを活用し、写真や映像とともに記録を残させたりすることで、生徒の思考を見取り、授業の改善につなげるように工夫を行った。

授業で「する・みる・支える・知る」の体育の見方・考え方について、生徒に考えさせ、「する」以外の部分における自己の役割について、お互いが協働して授業に取り組めるように工夫を行った。

体力の向上については、生徒に自分の記録を分析させ、課題を明確にしたり、運動プログラムを友達と協力して行うことができるようにしたりし、主体的に運動に取り組むことができるように工夫を行った。

4 成果と今後の課題

共生の視点を持って授業をデザインすることで、技能に偏ることなく、指導事項をバランスよく単元計画の中に配置することができた。また、生徒が領域の特性を味わうことで、種目のおもしろさを感じ、積極的に授業に取り組むようになった。

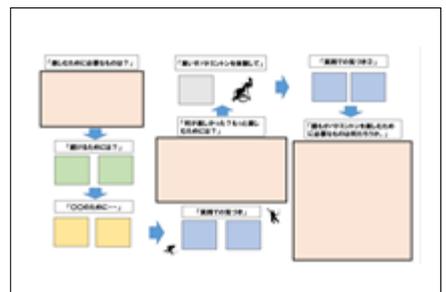
今後は、デジタル体育ノートの活用を精選、工夫して短時間で生徒の思考の変化等を見取ることができるよう工夫する。また、生徒が主体的に運動に取り組むことができる工夫をする。



デジタル体育ノートの活用



車椅子バドミントン体験



振り返りノートの工夫